

公害のおお世界

奇怪な新公害いつあなたに

主催：理科部連合会本部

外出すれば、オキシダントや硫酸ミストによって目、のどをやられ、食事をすれば、米にはカドミウムが入っていて安心して食べられない、のどが乾いて喫茶店でも入って甘いものでも飲めばチクロで有害と、今や身のまわりは全て公害でおおわれてしまっている。それでは、こうした公害はいかにして表出し、我々をおびやかすに至っているのか。

近代産業の発展に伴った発生として明治中期に逆のぼる。製糸紡績業を中心に、製鉄造船業等の重工業が重視されだした当時、エネルギー源であった石炭のばい煙がその発端であろう。しかし、当時ではこのばい煙を出す煙突はまだ深刻なものとしてではなく、未来の繁栄を表わすシンボルの塔として見られていたのである。それがやがては自分達の首をしめるであろうことも知らずに。当時、そのきざしをみせていたのは、鉱物の採掘等に伴う鉱害問題であった。足尾鉱山の鉱毒事件、別子鉱山の煙害事件などがそれである。しかし、これらの事件は、その場その場で解決されてしまった。

第一次大戦前後には、人口の都市集結が始まるに伴ない、生活環境の劣悪化がみられ、現在みられる公害のほぼ全様がここに露出してきている。しかし、まだこの当時では生産力、国防力の増強を優先する体制下にあったために、その具体的な、ばい煙、排水汚染、騒音、悪臭等は、個々の必要な時、所のみの処理としてしか対策はなかったのである。このようにして事の重大さを知らず、公害対策は皆無の状態に拡大され、次第にとり返しのつきにくい方向へ進んでいったのである。

第二次大戦後、と言っても昭和20年代後半になってはじめて公害に関する問題の認識が各地で高められてきた。しかし、戦後の復興期から急激な成長発展期を迎えた今でも生産活動があまりにも注目されすぎている。

自動車の排出するガスには一酸化炭素、二酸化炭素、亜硫酸ガス、鉛化合物と走る煙突として、企業では煙突からばい煙、排液、ヘドロ、亜硫酸ガスとその主なものは、各工業地帯で深刻さを深めてゆく。そして、自動車はその本来の姿である車両自体にとり付けた原動機と動力源を用いて、レールによらず自由に路上、山野、河川などを運転走行するということすら制限されようとしている。それにも増して、人間自身の身体に危険を及ぼしてきている。それはこの夏に正式に発表されていた光化学スモッグ注意報という奇怪な注意報もしばしば出されていることで明らかであるし、水俣病水銀中毒なども現に多数の死者を出している。たしかに今の世の中では、科学文明は次第に人間の意に反して人類の手のとどかないところまで暴進しようとしている。その具体的な一例がこの公害問題として露呈されているのである。公害に対する解決が明確に又、具体化され、遂行されてゆかない限り、文明とは名ばかりの「人類の文明」から「文明のための文明」と化してしまうのである。そこでこのたび、公害に対する意識を高め、この公害問題を単なる歴史上の一過程だと、そのうちなんとか片付くという楽観的な姿勢にならず、真剣に一人一人が考えなければならないのである。私達はこの企画がその為の一助とならんことを願ってやみません。